

能海寛の将来した中国・四川省の拓本

タイトル	能海寛の将来した中国・四川省の拓本
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 13 号
ページ	31－36
発行年	2008.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883－4183



能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年
5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東
谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶
応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意
を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教
徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山に
よる体力の練磨をなす。郷里にあっては地方史
を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小
屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として
釈迦直伝の大蔵經の經典を求め英訳經典世に出
す目的で当時鎖国中であったチベットへ求道の
ため身を挺し仏教巡礼探検を实践した功績は偉
大有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓
を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」
西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書
として永遠に伝う。

能海寛の将来した中国・四川省の拓本

隅 田 正 三

能海寛が将来した拓本は、全部で4種7枚あり、「蜀丞相諸葛武侯祠堂碑文」（約1,000文字の拓本）はタテ268.5cmヨコ、139.5cm、の超特大である。峨眉山の「永明華寺新建銅殿記碑文」（王疏宗王義の書）と「普賢金殿記碑文」（傳光宅編集した遂良の書）の2点は、タテ135.0cm、ヨコ81.0cmで萬暦31年（1603）の碑文の拓本。あとの1点は、4幅の組物の拓本で、一幅の大きさはタテ113.5cm、ヨコ32.5cmである。筆数の異なった書体が絵文字のように描かれている。珍しい拓本です。能海の記録には「貴重」と記している。これらの拓本を本誌に掲載して、広く研究者への情報提供としたい。



この拓本について、詳細をお知りのお方は、研究会事務局まで御一報をお願いします。

現在、「蜀丞相諸葛武侯祠堂碑」と「大峨眉山永藏明華寺新建銅殿記碑」の拓本を解説中ですが、□字のところは、判読できていない箇所です。この種の拓本についての重要度について、専門知識をお持ちの皆様方よりの情報を得るために、今回、不完全ではあるが、判読できたまでを「石峰」誌上でご覧いただきます。一世紀以上前の拓本で、能海寛の将来品として大切に保存していかなければなりません。「峨眉山普賢金殿記碑」の拓本の内容については、次号で活字掲載します。

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑

節度掌書記侍御史內供奉賜緋魚袋裴度撰

營田副使檢校尚書吏部郎中兼成武少尹侍御史賜紫兼兼柳公綽書

受嘗讀舊史詳求往愷或事車君之節無開國之才待三身之道無治人之道四老傳美善而不知其所以爲善者求賢如不及箴器在身者寧主而後劬於是時也

在簡策大名蓋天地不行小官治行大矣亦孔之昭故州平心與元直神交洎乎三顧而許以驅馳一言而寔其機

劉氏續承舊服結吳抗魏擁蜀稱漢永政達於荒外道在行乎坤中詭謂阻深殷為強國誰謂蓮胎勸為致兵則知

而不日殘人以逞其宜定南方也不以力制而取其心耶震疊諸夏也不敢角其勝負而止俟其存亡法加於人也雖

德及於人也雖弈葉而見思此所謂精義入神自誠而明者矣若其人存其政舉則四海可平五服可傾而陳霸之

德以吞宇宙不黷武以爭彝常及出斜谷據武功久兵屯田為久駐之計與敵對壘待可勝之期雖平居人如過雷

養威若天假之年則繼大漢之祀成先主之志不難矣且權傾一國聲震八紘而上下無異詞始終無愧色苟非

聖上西南奧區寢亂餘烈羅肱未息汚俗

詔相國臨淮公由秉鈞之重承推轂之寄戎軒乃降藩服乃理將明帝道陳

陽滋死於中無事宇下無辜材人矢繼方我有餘地則諸葛公在昔之治與
 陰管記隨獲施而愛上望詞宇而悵謁有義可象以赫厥靈惟敷且不
 忘而卑表之立古者成奉拳一

斯文以示來褒况如仁之歎終古不絕其可闕乎乃刻貞石庶此都之人存必拜之感云尔

先主思啓疆宇，擾攘靡休。英雄無輔，爰得武侯。先定蜀土，道德城池。禮義干櫓，煦物如春。化人如神，勞而不怨。困

馬死而可作當小天下尚又作固可衡左齊營晏忽冀齋長力代而生易也而理曹思豐勿下皆然矣

人過于嗟嚴立威受譴罰聞之痛之或泣或絕甘棠勿剪邇斯奪繇是而言殊途於忠恕孰不感悅哉

植森森遺廟沉沉不列裡祀以迄于今靡不駿奔若有昭臨蜀國之風蜀人之心錦江清波玉壘峻峯入海陸

元和四年歲次己丑二月廿九日建
鑄字人魯建

鑄字人曾建

「蜀丞相諸葛武侯祠堂碑」の拓本

「蜀丞相諸葛武侯祠堂碑」

予同四川按察司檢憲濟南王敕萊陽曲銳觀武侯廟碑論裴中立所作文體□正如甘誓□征不革不□俚□予寬所書筆法遒勁如正人端士可敬可愛誠二□也且子寬

在唐元和時興其□公權皆以善書名作□□嘗以華□對

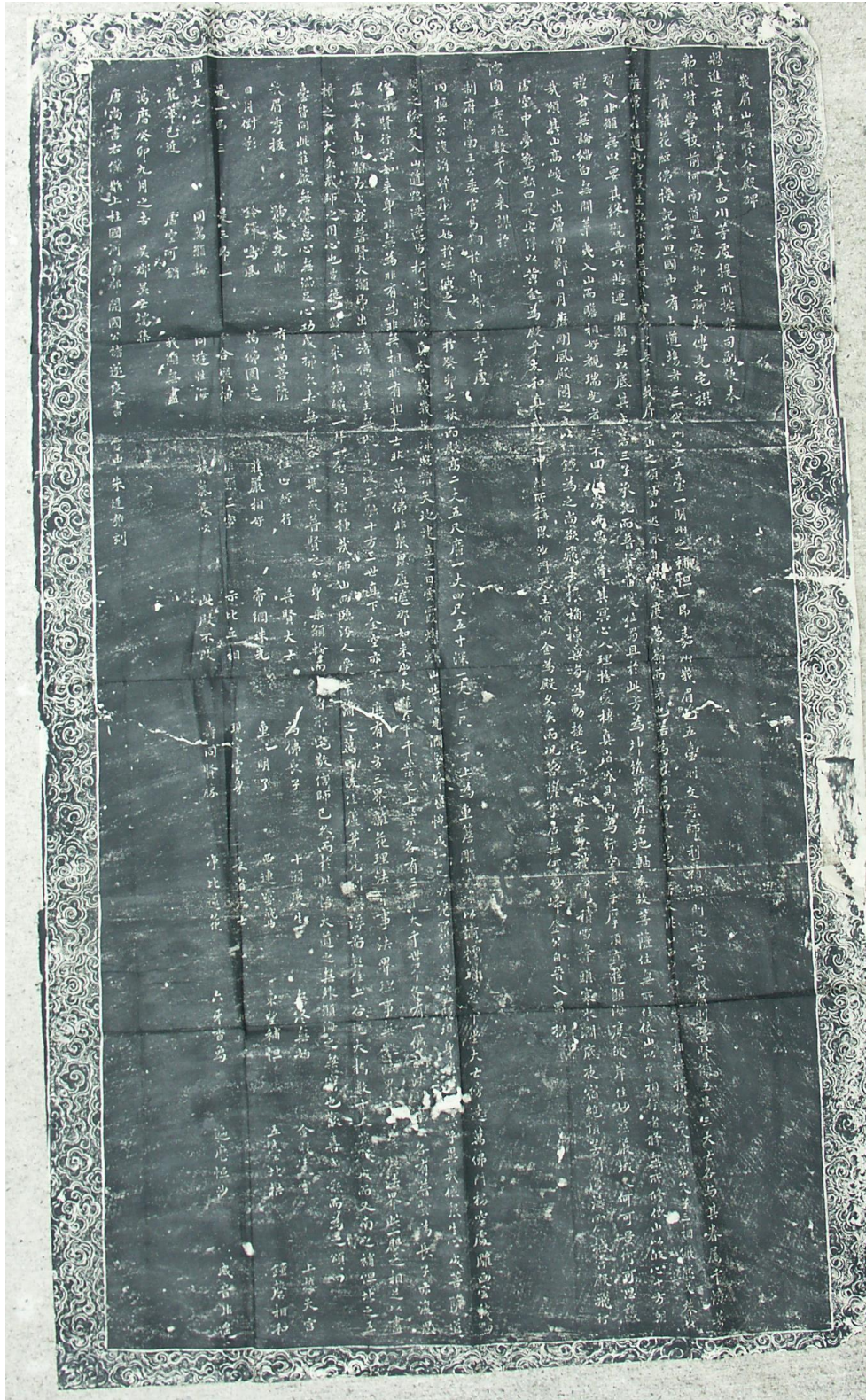
穆宗日心正則筆正筆正則可法□穆宗改□悟以為筆諫子寬為山南節度使判納賄舞文吏日□史犯法法在奸吏壞法亡□□文者兄弟皆守正不回所以筆法各臻其妙也□□□望德業比耶子儀□身任天下輕重者三十年歷事四朝以全德終始豈獨工於文字而已□噫人囚文而顯文因字而顯□則武侯之功德裴柳之文字其興□資格子其相興無□□□也耶 大明□□十年可己仲春既望□按四川監察御史□田榮華跋來□矣由唐□令將□載日 嘗過讀□有感為已而詢訪遂□ □□以遂其□□□□□而覽者無□□之吉 蜀府承□□□謹識

節度掌書記侍御史內供奉賜緋魚袋裴度撰 當田副使檢校尚書吏部郎中兼成都少尹侍御史賜紫金魚袋柳公□書

度嘗讀旧史詳求往哲或乘事君之節無開國之才得立身之道無治人之術四者備矣兼而行之則蜀丞相諸葛公其人也公本 系在簡策大名盖天地不復以雲當漢祚哀陵人心競逐取威定霸者求賢如不及藏器在身者擇主而後動公是時也躬耕南陽 自比管樂我未從虎時稱臥龍詩曰潛雖伏矣亦孔之炤故州平心興元直神交泊乎三顧而許以馳一言而其機勢繇是 翼扶劉續承旧服結吳抗魏擁蜀稱漢刑政達於荒外道化行乎域中誰謂阻深殷為強國誰謂□脆勵為□兵則地無常形人無 常性自我而作若金在鎔故九州之地魏有其七我無其一由僻陋而啓雄面出封疆以延大敵財用足而不日浚我以干戈 動而不日殘人以逞其底定南方也不以力制而取其心服震疊諸夏也不敢角其勝負而止候其存亡法加於人也雖死而無 怨德及於人也雖弈葉而見思此所謂精義入神自誠而明者矣若其人存其政舉則四海可平五服可傾而陳壽之評未極其能事崔浩之說又詰其成功此皆以變詐之略論節制之師以進取之方語化成之道不其謬歟夫委棄荊州不能遂有三郡此乃務 增德以吞宇宙不黷武以爭尋常及出斜穀據武功分兵屯田為久駐之計興敵對壘待可勝之期雜乎居人如適虛邑 我方養威若天假之年則繼大漢之祀成先主之志不難矣且權傾一國聲震八紘而上下無異詞始終無愧色苟非運應膺五百道 冠生知曷以臻於此乎故玄德知人之明者倚杖日魚之有水仲達奸人之雄者嗟稱日天下奇才度每迹迹其行事度其遠心願奮短 以排群議而文字蚩鄙日日未果元和二年冬十月 聖上以西南奧区冠亂餘烈罷略未息汙俗未清輟我股肱為之母乃 詔 相國臨淮公由乘鉤之重承推□之寄戎軒乃降藩服乃理將明 帝道□落綏懷薄傷 仁風閭閻滋府中無留事宇下無棄材人知向方我有餘地則諸葛公在昔之治興 相國當今之政異代而同塵矣度謬以 庸薄獲參管記隨 旌旄而爰止望祠宇而修謁有儀可象以赫厥靈雖徽烈不忘而碑表未立古者或拳拳一善或師長一城尚流斯文以示來裔況如仁之歎終古不絕其可關乎乃刻貞石庶此都之人存必擇之感雲爾銘曰昔在先生思啓疆宇擾□摩依英雄無輔受得武侯先定蜀土道德城池禮義幹櫓照物如春化人如神勞而不怨用之有倫柔服 □落鋪敦渭濱撰跡迹畏威雜居懷仁中原旰食不測不克以待可勝允臻其極天未悔禍公命不果漢祚其亡將星中墮反旗鳴鼓 猶走司馬死而可作當小天下尚父作周阿衡佐商兼齊管晏摠總漢肅張易代而生易地而理遭遇豐約亦皆然矣嗚呼奇謀奪發美志夭過于磋巖立咸受謫罰聞之痛之或泣或絕甘棠勿剪駢邑斯奪繇是而言殊途共轍本於忠怒孰不感悅苟非誠慤徒雲 固結古栢森森遺廟沈沈不殄禋祀以迄于今靡不駿奔若有照臨蜀國之風蜀人之心錦江清波玉壘峻岑入海際天如公德者 摧殘余蒞茲土表□莽礫之餘整□最屬之□□以中□勲名將相包拳子寬正□伯之□相□護不似薦福□鎖也 皇清康熙十一年三月朔撫蜀中丞□森識 元和四年歲次己丑二月廿九日建讀唐碑文□□書端巖稱□絕匪溢當時不以文□推裴□重本也文傳者文□重□□君子哉奧東上番□膠西宋可發識 字人魯建

【解説】

中国の諸葛亮（181年～234年）字は、孔明。山東省近南県の人。劉備の三顧の礼をうけて軍師となり、「天下三分の計」を説いた。蜀王朝成立後、劉備の遺児劉禪を補佐しながら、曹氏の魏王朝に挑戦しつづけた。この碑文は、蜀の名宰相（総理大臣）諸葛亮（孔明）を顕彰するもので、当初は、元和4年（809年）2月29日に「蜀丞相諸葛武侯祠堂」として成都城内に建設されたものである。その後、劉備を祀る「漢昭烈廟」と同じ境内に移された。現在の堂宇は、清の康熙11年（1672年）3月1日に再建された。当初の碑文に少し小さめの碑文で数箇所挿入記述が歴史を伝えている。「武侯」はおくりなである。



「峨眉山普賢金殿記碑」の拓本

我眉山鈞殿法派
普行澄清海
智鏡常照明
開思修心德
寬適性圖融

— 35 —

「大峨眉山永明華藏寺新建銅殿記」

(本文)

太上在宥六合誕育薰人嘉與斯世共□極樂遺沙門福登齊聖母所頌□藏国□□山登公□後事還禮峩峨鐵□殿猛風□作棟宇若□固自会塵世公德出石鐵若□若□若非□□非劣外飾炫燿內體弗賢

有摧剥相未表殊利□金三品銅為重寶□彼玉毫倣以金地中□大士天人□□春属凶□樓閣□觀水樹花鳥七寶嚴飾罔不具足不越咫尺便見 西方以□功□□施一切衆生□□在身□未來□皆得親□供養一切法佛菩薩共澄無上菩薩□歷十年□願力有加 □王殿下父章河間之□奇□□東平之樂善聞登公是願以四方多事病療有恤久之乃損數千金拮据經始為 国祝□会大司馬王公節鎮來蜀念蜀□當兵□□後渭宜漉以法潤洗□陰氣乃与稅監丘公各捐□以□其經費己中使銜

命宣

慈□賜尚方金錢置葺焚修常□若干命方僧□絜者主之店工於萬曆壬寅春成□癸卯秋還報王額其寺日□明華藏云□迹□人來遊來□歎 未曾有登公□余九峯山中□為之記□我如来弘開□門法華会中廣施方便□相□雲遍□□□竹林布地上□色天所以使人見像起信□信為公德之母萬美所□生也法界有情種々□□執妄為真随固成果墮入法□當知空為本法中本空真常不滅六□緣□互相磨湯皿如金在鎔爐冶煎 灼非金之性舍彼鎔金□金之□了不可得十方□□皆吾法身一切種智成淨□染有情無情皆五法性大覺聖人□哀□心廣況三乘惟□智用渾 之為一□非因像生信回信生悟□求解脫若濟河無筏無有是□□密義內熏莊嚴外度□廟塔□為□神馨絜香花以為供養□法足施以破 貪執皆以使人革妄歸貞了蛇達□□而已正偏知覺若思念々登公□妙峯力脩梵行智用高□法中之龍象山西蒲抄萬固寺僧也乃糸以贊日世尊大慈父利益於衆生公德所建立種々法方使後代□□□嚴□日益□如來說法相皆是虚要□云何大蘭□□徧一切□□塵刹土中塵□皆 是佛衆生正□迷深夜行大澤□面不見佛□々岡所觀□遇紅日輪□然出東方三千与大千萬象俱□照□如陽春玉百昌盡嚴生本自含萌芽因法而□潤□如母□子形神□相通□彼慈□相酌我甘露乳□知佛願弘聖凡盡融攝焚々白毫相出現光明山帝□日□□寶珠仍□爛攔盾互 周□□戶洛洞□天龍法金剛擁護於後完□非凶絵力之非出□功於一彈抬問樓閣□□彗星斗為珠□日月成戶□即遇阿僧□此□□不壞願我大地人稽首咸三依一覽心目了見殿回見性□加精進力了無能見者佛法難度量讚歎□成妄法妙樓觀間各有無量光各脩普賢行慎勿 作□□我今稽首禮紀此銅殿碑佛佛為□盟同歸智淨海 萬曆癸卯九月之吉

賜進士第翰林院撫討漢嘉就鶴居士王□宗頓首撰 晋右軍王羲之書

雲中朱建□□吳郡吳士□集

峨眉山銅殿法派 普行澄清海 智鏡常照明 聞思修心德 覺遍性圓融

【解説】

王疏宗。王羲之の書。傳光宅が編集した遂良の書「峨眉山普賢金殿記」がある。道光年間に大災があり、萬曆年間に宝雲和尚が再建した。萬曆31年（1603年）9月吳郡吳士端集。峨眉山銅殿法派。これらの拓本は、明治32年に中国・四川省峨眉山登山の後に麓の街で入手したものである。